

異人館が北野町にできたわけ

北野町から山本通にかけては「異人館」と呼ばれる洋風住宅と和風住宅のミックスした、神戸ならではの異国情緒あふれる住宅が30数棟残っている。この界隈の主要部分は、国・市によって伝統的建造物群保存地区に指定され、この景観を保存しようと努めている。

1867（慶応3）年12月7日の神戸開港後、外国人居留地が市役所の西側一帯に設置されたが、来日する外国人の数が多く住宅不足という問題が生じたため、政府は居留地以外に生田川から宇治川までの間の雑居を認めた。そこで居留地に住めない来日外国人は新たな住環境を求め、山の手に住居を建てることにした。さらに、居留地内に住んでいた外国人たちも商売が安定していったことから、仕事場と住居を分けることを考えはじめ、こうした人達も山の手へ住宅を求めていったのである。南向きの斜面に、神戸港を一望できる恵まれた環境にある、この北野町界隈に異人館が建ち並ぶようになったのは明治20年代頃（1887～1896）のことであった。外国人建築家のもと、日本人大工・左官・石工が腕をふるった力作である。これら異人館の特徴は、木造2階建て、ベランダ、張出窓があり、外壁はペンキで塗られ、屋根の上にはれんが積みの煙突がのっている、というものである。なお、北野の異人館が脚光を浴びるようになったのは1977（昭和52）年からはじまったNHKのドラマ「風見鶏」の舞台になってからで、それ以降、神戸を代表する観光ポイントとなり多くの観光客が訪れるようになった。

なお、今でも外国人が多く住むこの北野町界隈には、カトリック神戸中央教会、神戸ムスリムモスク（イスラム教寺院）、関西ユダヤ教団、ジャイナ教寺院など、様々な国の宗教施設が点在している。

